金海と書いて「キメ」。国立金海博物館に到着。開館年度の日韓交流展では、韓国内の馬具を中心とした資料を借用する予定である。ソウルにある国立中央博物館が現在新館建設中であり、今回の日韓交流展に対応することが困難であるとのことで、韓国側の窓口が金海博物館になったのである。韓国内の数カ所の機関から資料を借用するに当たり、金海博が一度集約して、本県と契約を交わすという方式である。

国立金海博物館

訪問当日は、学芸室長が不在ということで、学芸研究士のYoon Tae-young氏に対応していただいた。昨年度にも訪問し、考古博の概要、日韓交流展の主旨については説明していたので、今回は実務的な手続きの進め方等を確認した。

金海博学芸員と通訳のカンさん

韓国では、考古資料は国が一括管理し、必要に応じて各地の博物館や大学等が展示・収蔵している。日本のように、調査をした機関がまとめて保管するのではなく、同じ遺跡出土の資料が数カ所に分散していることも多々あるのだ。また、頻繁に所蔵先が変わることもあるので、目的の資料が現在どこに収蔵されているのかを確認することは意外にも大変な作業なのである。

「金海博でも協力はするが、原則的には宮崎側で調査するように。」と言われた。一瞬、我々は顔を見合わせた。昨年度の訪問では、「所蔵先確認は金海博で、」といったニュアンスの話であったのだ・・。まあ、借りる側が汗を流すのは当然なのだけれど、現在ピックアップしている200点前後の資料を全て確認するには、結構時間かかるぞ・・。数週間は韓国に滞在しなければ・・。誰が・・。韓国好きだけど、言葉はできないし・・。不安を胸に、しかし何とかしなければ、という決意を持って席を立った。

釜山市福泉博物館

ところで、金海という町は、旧加耶の古都であり趣のあるところだったけど、何故か制服屋さん（真面目な中高生向けの）と下着屋さんが非常に多かった。それも下町に密集して、２．３軒おきに制服と下着が売られているのは、少し奇妙な風景だった。

金海を後にした我々は、釜山へと移動した。釜山市博物館の分館である福泉博物館には宋桂鉉（館長）がいるのだ。彼は、1993年に宮崎で開催した埋蔵文化財研究会（通称九阪）で、韓国の甲冑出土古墳に関する発表をしていた。

アポ無しで飛び込んだにも関わらず、宋氏は旧友を迎えるように親切に対応してくれた。馬具についての情報も提供くださり、釜山大学の金斗喆氏（韓国の馬具研究の中心人物の一人）に紹介していただいた。

金斗喆氏

福泉博は、有名な福泉古墳群を保存整備した隣接地に建つ新しい博物館である。馬甲と馬冑で重装備の馬の復元には圧倒された。完全な状態の馬甲を実見したのは初めてであった。（あんな重いもの着せられたら馬はたまらんで！）

整備された古墳では、多量の須恵器や鉄製品を副葬した主体部をガラスの覆屋で公開していた。（夏は辛いらしい。）

甲で重装備の馬

実は私は、今回の訪韓で、大学の考古学研究室の先輩である金貞姫さんに会えないものかと考えていた。しかし、実家が釜山ということ意外何の手がかりも無かったのだ。福泉博で仕事の話が一段落した時、恐る恐る宋氏に聞いてみた。というのも「韓国で金さんを名前だけで探すのは無茶！」と通訳のカンさんに言われていたからである。すると宋氏は「あっ、知ってる。電話してあげようか？」なんたる幸運、奇跡的。実は金斗喆氏の奥さんになっていたのである。同じ姓同士では結婚できないと聞いたことがあるけれど・・。（最近は、出身地が明らかに違う場合は結婚できるのだそうで。）金斗喆氏には、お会いして馬具のことを相談しようとしていたので、二重の幸運であった。

天馬塚内部

釜山大学で金斗喆氏と仕事の話をして、奥さんも一緒に夕食を、ということになった。先輩との１２年ぶりの再開。美味しいドンドンジュ。すっかり舞い上がって昔話に興じていた私に再度の幸運が舞い降りた。金貞姫さんは、日本留学を終えて帰国後は、慶州大学、慶北大学、東國大学などで非常勤講師や兼任教授をされていたのだが、旦那さんの釜山大への赴任を機に離職していたのだ。今回の訪韓の目的、金海博でのいきさつを話すと「私が調査しましょうか？」とのお言葉。日韓両国の言葉と考古学に通じた彼女は適任である。しかも馬具の研究者である旦那さんの助言もいただけるのである。我々は思わず握手してしまった。

帰国後、様々な事務手続きを経て、正式に金貞姫さんに韓国内での調査と調整業務を依頼することになった。今回の韓国資料調査では、様々な幸運と成果があったけれど、先輩に会えて、しかも調査まで引き受けてもらえたことが、私としては一番大きかったと感じている。

釜山を後にした我々は、慶州博物館、天馬塚を調査し、大邱（テグ）に宿泊した。数ヶ月前に大規模な地下鉄火災があった街だ。正直、火災のことはすっかり忘れていた。翌朝、ソウル行きの特急列車（セマウル）に乗るため東大邱駅に向かう我々は、地下鉄の駅構内まで入って愕然とした。今だ黒いススにまみれた壁には、犠牲者を悼む花や写真、メッセージが所狭しと貼られていたのだ。華やかな大都会の地下で、悲惨な事件が起きていたのだ。ご冥福をお祈りします